

視 察 報 告 概 要

- 1 視 察 日 時 平成27年10月30日（金）
 - (1) 午前9時45分～午前11時00分
 - (2) 午後1時15分～午後2時40分

- 2 視察先及び視察事項
 - ・視 察 先 (1) 川越市立博物館（埼玉県川越市郭町2-30-1）
 (2) 朝霞市博物館 （埼玉県朝霞市岡2-7-22）

 - ・視察事項 (1) 川越市立博物館（収蔵庫を中心に）について
 - ① 博物館の概要、予算
 - ② 収蔵庫の事業概要、予算
 - ③ 課題、展望

 - (2) 朝霞市博物館（収蔵庫を中心に）について
 - ① 博物館の概要、予算
 - ② 収蔵庫の事業概要、予算
 - ③ 課題、展望

3 視察の目的

所沢市では、教育振興基本計画において、収蔵庫の設置に向けた取り組みを推進しており、現在、「ふるさと所沢」の自然・歴史文化等に関する資料を収集・保存し、調査・研究、活用する「ふるさと研究活動」を行っている。しかし、資料を分散して保管しており、保管場所の面積も十分ではなく、長期的な保存にも資料の有効活用にも課題がある。

このことから、先進事例の視察・調査を行い、今後どのように取り組みを進めていくか等を含め、委員会としての今後の審査等の参考とするため、視察を行った。

4 視察の概要

(1) 川越市立博物館（収蔵庫を中心に）について

吉田川越市議会議長から歓迎の挨拶、石本委員長の挨拶の後、教育総務部田中博物館館長ほか1名から視察事項の説明が行われた。その後、質疑応答、施設内の見学、植竹副委員長の御礼の挨拶を行い、川越市立博物館での視察を終了した。

① 博物館の概要、予算

川越市立博物館は平成2年3月に開館し、今年で25年である。建物は、川越城の二ノ丸の郭につくられた蔵をイメージして建てられた。地上3階、地下1階だが、展示は1階のみ、収蔵庫は2階に集中させている。隣にある美術館は平成14年に開館しているが、もともと博物館の駐車場だったところに建てたため、多少不便になっている。

《沿革》

昭和58年に市制60周年記念事業として準備室が設置され、平成2年3月に開館した。同年11月に埼玉県景観賞（現在は彩の国景観賞）に選ばれる。3年後の平成5年に入館者が50万人に達する。平成14年12月に美術館を開館する。平成17年2月、常設展のリニューアルに係る川越市立博物館常設展示検討委員会が設置され、平成24年に提言を受ける。

平成18年2月、駐車場隣りにある川越城本丸御殿が日本100名城の選定を受けた。同年4月、博物館市民ボランティアによる本丸御殿・蔵造り資料館ガイドを開始。平成20年9月から23年3月にかけて川越城本丸御殿の保存修理を実施する。以前の修理は、昭和40年代の埼玉国体の時に突貫工事で行ったため、今回は最新修理を含め実施するものである。

平成25年7月、入館者は300万人に達した。

《特色》

ア 人文系の歴史博物館である。川越は江戸時代から明治にかけて発展したため、展示品の主眼は近世。

イ 展示の流れが江戸時代から歴史を遡る構成となっている。

ウ 学校教育と連携している。年間9万人を超える入館者の3分の1が学校の児童・生徒である。川越市内の小学校3・6年生は必ず博物館に来館して授業等を行うシステムを構築し、本丸御殿と蔵造り資料館を紹介している（国内現存の御殿建築の本丸御殿は高知城と川越城のみ）。蔵造り資料館は、伝統的建造物保存地区にあり、当時の蔵造りの敷地全体を見学できる市内唯一の施設として博物館が所有、公開している。昨年から国の補助金により耐震保存化事業に着手している。

《施設》

1階は、展示部門として常設展示室と特別展示室、教育部門として体験学習室、視聴覚ホール、図書閲覧室、学芸研究部門として資料調査室、文献史料室、管理部門として事務室、会議室、保管部門として入荷の車が入るためのシャッターがついている荷解室がある。荷解室には2階収蔵庫と連絡するためのエレベーターがある。管理部門、学芸研究部門、保管部門への一般入場はできない構造になっている。

2階は一般収蔵庫と特別収蔵庫がある。

常設展示については、まず入ると江戸時代の展示があり、中心部には川越の城下町のジオラマがある。本館には常設展示の解説員が常時4人おり、展示にあわせて解説を行っている。そこを抜けると実物大の蔵の景観をイメージした通りがあり、

蔵の通りのジオラマを置いている。左に入ると中世、奥に古代、さらに原始と分けた展示があり、学校の授業も行う。ほかに、蔵1棟分の建築費をかけ、蔵の建築工程を示した展示や、櫓を組んだ蔵の上棟式（建前）を復元した展示も行っている。

体験学習室については、毎週土曜日ないし日曜日に、講座・教室を行う。大人向け、子供向け、さまざま実施。川越は繊維産業がさかんであったため、機織り機を置き、当館の登録グループによる実演や体験を週2、3回程度実施している。

視聴覚ホールについては、100人収容可能であり、ビデオ視聴コーナーには視聴機器を複数設置しているが、ブラウン管の小さな画面であるため故障して修繕できないものもある。

図書コーナーは入館者も利用できる。

資料調査室は主に古文書の調査を行う。市民から寄贈された古文書が入った段ボールが積み上げられ、常時、指導者1人、スタッフ2人で目録化作業を行っている。

荷解室について、必ず部屋の奥にある燻蒸室で2回の燻蒸を行ってから収蔵庫に運んでいる。

一般収蔵庫及び特別収蔵庫は、収蔵率100%を超えており、収蔵スペースが不足している状況である。

《職員体制》

常勤職員13人。内訳は、館長1人、学芸担当4人、管理担当3人、教育普及担当5人。教育普及担当のうち3人は学校の指導主事で、学校との連携にあたる。臨時職員は12人。半数勤務とし、常時解説員4人、受付2人である。

《入館者数》

博物館は9万8,205人（前年比8%増）、本丸御殿は13万6,669人（前年比%減）、蔵造り資料館は7万8,246人（前年比1%減）。川越城本丸御殿は、最近の城の人気とワンコイン（100円）で入館できることが魅力となっている。博物館の入館料は200円、蔵造り資料館の入館料は100円となっている。

入館者の推移については、ほかの博物館と同様、開館後しばらくの期間、平成5年までは上昇し、それ以降減少傾向にある。

学校との連携により、小中学校の児童・生徒が多い（全体の3分の1）。学校との連携での来館者内訳は、市内小学校3・6年生21%、県内小学校4年生28%、市外中学校1年生45%である。市内小学校3・6年生は必ず来館する仕組みがある。小学校4年生は、現在の学習指導要領における県内の特色ある地域という授業で小川町、秩父市、川越市が見学対象になっている。市外中学校1年生は、修学旅行の練習としてグループで見学に来ている。

《博物館事業》

展示は年間5回であり、企画展示2回、収蔵品展1回、新作名刀展1回、授業の学習課程にあわせた展示である「むかしの勉強・むかしの遊び」展1回である。収蔵品展ではテーマを設けて展示している。

講座・教室について。教育普及活動として行っている。大人向けが年間29回、古文書講座、歴史講座、企画展に関する教室、野外博物館教室等。子供向けが年間30回、子ども博物館教室（半日コース）と、子ども体験教室（1日コース）があ

る。また、夏休み子ども体験、夏休み遊びの時間という事業も行っている。たとえば、華道体験、藍染め教室、本丸御殿を使った茶道教室等がある。博物館ボランティアに登録者に協力してらい事業を実施している。子供向け事業の人気は作って持ち帰ることができることにある。

《予算》

平成27年度の博物館理費は総額9,897万円。博物館等運営管理は8,056万4,000円。主に博物館、本丸御殿、蔵造り資料館の維持管理費である。

博物館の充実費として1,384万9,000円を計上しており、主に展示、講座等の開催費にあたる。資料収集保存・調査研究費が455万7,000円で、主に収集した資料の整理及び報告書作成費用である。

平成27年は本丸御殿の改修工事があるため予算が高くなっている。平成26年度から蔵造り資料館の耐震化工事が入ってきたため多少高くなっている。通常の前算額は6,000万円から7,000万円程度となっている。

② 収蔵庫の事業概要、予算

《予算》

平成27年度の主な予算は、年2回の燻蒸設備保守点検として22万8,000円である。保守点検に合わせて燻蒸も行う。館内消毒として100万円。館内の害虫を死滅させるため3日ないし4日間休館して行う。保存環境調査として76万円。特別収蔵庫に害虫が発生した場合に館内の害虫について調べるための予算であり、この調査により特別収蔵庫に害虫が発生していることが分かった場合には、臨時的に特別収蔵庫燻蒸委託料を計上し、燻蒸を行う。ことしは155万5,200円の委託料で実施している。3、4年に1回のペースで行っている。

《収蔵資料点数》

収蔵資料3万7,746点。歴史民俗資料2万1,050点、古文書1万6,450点、美術工芸品246点。寄贈3万7,485点、購入261点。購入合計額は5,708万7,766円である。博物館開館当初は美術館がなかったため、美術工芸関係のものも多く購入していたが、現在、美術工芸品は主に美術館で購入している。

《収蔵施設》

博物館内の収蔵施設は収蔵の許容量を超えている状態である。そのため、市内の学校の空き教室を使っている。現在3校5教室に収蔵している。児童・生徒数の増減により空き教室が変わるため収蔵場所も移動している。多少環境が良くなくても持ちこたえられる民具の類を収蔵している。

③ 課題、展望

ア 常設展示のリニューアル

常設展示は開館以来25年間リニューアルが行われていないため、施設が老朽化し、視聴覚設備のブラウン管等、修理に必要な部品調達ができないものの中にはある。研究により新事実が明らかになったもの、埋蔵文化財が増えてきたこともあり、

現代にあわせた展示にしたいと考えているが、予算がなかなかつかない。

イ 新たな収蔵施設の確保

空き教室ではなく、それなりの環境を備えた収蔵施設の確保が急務である。ものを収蔵することは博物館にとって重要な使命であり、リニューアルよりも先行して実施すべきではないかと思っている。

ウ リピーター入館者の確保

館としての魅力を高め、リピーターに来ていただくための努力を重ねている。ここの夏休み時期に合わせた妖怪の展示では、例年になく多くの入館があり、入館者は増加している。

◎質疑応答

質疑 入館料収入はどのぐらいか。また、子どもにも入館料の支払いを求めるのか。

応答 中学生以下は無料です。入館の3分の1を占めている学校は当然無料です。昨年度の入館徴収料は、博物館では、678万2,010円でした。本丸御殿が1,119万260円、蔵造り資料館が397万8,450円でした。

質疑 観光地として観光の所管課とはどう連携しているのか。

応答 博物館は教育総務部の一つの課として位置づけられ、社会教育施設として役割を果たすようになっていきます。一時、指定管理者の話や市長部局に組み入れるような話もあったのですが、教育委員会の中に残っているという現状です。

質疑 寄贈が3万7,485点とのことだが、これは延べ数だと思うが、寄贈品はすべて引き受けているのか、選別しているのか。

応答 寄託や寄贈の申し入れがありましたら、直接お宅を訪問し現物を確認し、お断りすることも多々あります。民具もかなりの数になっていますので、基本的に同種類は受けないという形で調整をしています。処分したいという理由で寄贈を希望する方もいるのでお断りすることもあります。資料として価値を認められれば受け入れますので、基本的には受け入れるものです。

質疑 寄贈の受け入れ点数は平成2年の開館以降は減ってきている傾向にあるのか。

応答 寄贈の問い合わせは常時あるので、常時お伺いする予約が入っている状況です。受け入れ自体が減少しているという感じはありません。収蔵庫の通路にも収蔵品を置いている状況です。

質疑 近・現代のものや、戦後・昭和初期のものも寄贈を受け入れているのか。

応答 受け入れの対象としては近代、明治・大正・戦前ぐらいのものが多く、古写真や教科書もあります。戦後のものとしては古いおもちゃやカメラ、古い電算機、冷蔵庫、洗濯機等もあります。

質疑 収蔵施設のキャパシティをオーバーしている、また、リニューアルよりも収

蔵をなんとかしたいとの説明があったが、今後について何か計画があるのか。

応答 収蔵施設については、これまで市の実施計画には上がっていません。来年度から第4次総合計画が始まるのですが、その中に収蔵施設新設をうたっていますが、具体化はされていません。

質疑 市制60周年記念事業として博物館が建ったとのことだが、その前から、歴史的な価値のあるものを何とかしなければならないということで、検討をされていたのか。

応答 当時のことはよくわからないが、川越市が歴史あるまちで古くからのものを多く収蔵しているというのは周知の事実です。博物館の大きな使命に、そうしたものを受け入れるということがありますので、受け皿として施設が必要だということで建設が始まったということを知っています。

質疑 常勤職員13人のうちの学芸担当4人は、専門職ということで人事異動もないのか。

応答 学芸担当は当然学芸員の資格を持っており、これまで職員の異動先としては教育委員会内の文化財保護課、まれに公民館への異動もありましたが、学芸員職採用の職員については、今のところ、文化財保護課と当館のみでの異動となっています。

質疑 学芸員職の採用は、たまたま採用している時期に有資格者がいたということではないのか。

応答 一般事務職ではなく学芸員の資格を持っているという条件で採用しています。

質疑 学芸員職としての採用者は年齢としてはどのぐらいの方なのか。

応答 現在高齢化しておりまして、40代から50代ぐらいです。

質疑 今後、次の世代も考えないといけないという展望があるのか。

応答 ぜひほしいところです。3、4年前に文化財保護課と合わせて当館でも学芸員の採用を行ったのですが、経験者枠で採用をしたため、現状としては30代後半から40代の職員の採用となっています。

質疑 博物館建設地として、当初はほかにも候補地があったのか。また、ここに博物館が建てられる前には何があったのか。

応答 候補地についてはわかりません。この博物館があった場所については、川越城の二ノ丸があった場所です。博物館ができる前は、陸上競技場としてのグラウンドがありました。

質疑 古文書がかなりあるようだが、古文書の解読もしているのか。

応答 資料調査室で主に古文書の目録作りをしておりますが、あわせて市民ボラン

ティアの方々において古文書を読む会を2班作っております。そこでは、およそ100年間川越にいた大和守家が前橋に持ち帰った藩日記100年分について解説を始めたところです。10人ぐらいのスタッフで読んでおり、1年間で読める分量は2、3年分ですので、今後50年程度を要する作業です。

質疑 博物館解説員や資料館でガイドをされる方は有償ボランティアなのか。

応答 博物館解説員は非常勤職員の扱いです。蔵造り資料館ガイドは無償ボランティアになります。博物館で保険に加入しています。

質疑 学校等に文化財の貸し出しはしているのか。

応答 博物館利用者研究会という組織を作っており、当館主催で小中学校の教員10人ほどが授業を行っているのですが、その授業の中で当館の資料を持ってもらって使ってもらっています。それ以外でも、積極的に、館の利用の中で博物館資料を利用いただくようにうたっています。

(2) 朝霞市博物館（収蔵庫を中心に）について

木村朝霞市議会事務局長から歓迎の挨拶、石本委員長の挨拶の後、施設内の見学を行った。その後、文化財課博物館担当栗原学芸員ほか2名から視察事項の説明が行われ、質疑応答を行い、朝霞市博物館での視察を終了した。

《博物館の主な費用及び業務》

朝霞市博物館は、平成9年2月に開館し、もうすぐ20年目をむかえようとしている。博物館建設に要した経費としては、総額で、約13億8,000万円であった。財源内訳としては、国庫補助金が2億1,000万円、県費補助金が1億円、市債が5億7,950万円、一般財源が4億9,624万円である。

平成26年度決算（職員人件費を除く）をもとにすると、施設全体を維持管理するのに、年度あたり約4,892万5,000円を必要とする。その内、展示事業等の運営に係る費用は、約2,000万円、管理に関する費用としては、約2,800万円である。その内、収蔵庫に関する費用、例えば燻蒸等の費用としては、運営に係る費用として含まれている。

博物館で行う燻蒸については、6月の湿度の高い時期に24時間燻蒸を行う。そして、1週間休館とし、作業を行っている。その費用としては約180万円とのことである。

毎年、夏と秋頃に保存環境調査を実施し、これにより、どこにどんな虫がいるのか、どこから侵入があるのかということが明らかとなる。博物館は、窓に網戸がない施設となっており、外気を取り入れることを想定していない。そのため、空調管理が必要となるが、虫の侵入経路は、玄関、職員通用口等である。そういった環境調査を行い、このままでは資料に害を及ぼす可能性があるということになると、害虫の駆除等を行っている。昨年、保存環境調査を実施したが、費用は約17万円で、ほこり、虫、カビの測定を行った。今回は、収蔵庫の入り口を重点的に対応し、約9万円で清掃を行った。この度の燻蒸委託料としては、約207万9,000円がかかったとのことである。

管理について、先ほど御覧いただいた消火設備は、法定で義務付けられている保守点検が年2回あり、約25万円の費用がかかる。消火設備として使用するガスボンベは、全部で49本あるが、10年経過したボンベは、消防法により、耐圧試験をする必要があり、ボンベ2本を交換した。その費用が、2本で約70万円であった。新しい施設では、ボンベの交換は、時期が来なければかからないことになる。

そのほか、業務用のエレベーターは、今後設置する場合、耐震設備が必要となる。朝霞市博物館は、既存適格として、当時の法律では適合している。エレベーターの保守点検として、年間約50万円がかかった。

そして、運搬用のクレーンについては、当時はクレーンが使用できたが、法改正があり、資格がないと扱えなくなった。クレーン等を使用する場合は、資格保持者が必要となっている。

以上が博物館の運営に関して必要となる主なものであり、そのほかは、電気代、粘着シート等である。

収蔵庫の管理において最も注意が必要なことは、資料にとって環境がいいということ、虫やカビにとって環境がいいということであり、まず燻蒸を行う必要がある。その

後、適切な環境が維持されているかどうかを確認するため、秋頃に環境調査を実施する。そこにおいて、カビや虫の発生が確認された場合は、対策を行う。

《収蔵庫の建設にあたって》

文化財等の資料は、基本的には捨てることができないので、増えていく一方となる。収蔵庫は、展示スペースの最低限3倍はないといけない旨のことが言われている。今後、収蔵庫等の設置を検討するにあたっては、既存の資料数を勘案し、余裕を持って設置することが適当である。

資料を御覧いただいた通り、埋蔵文化財はほとんど収蔵されていない。埋蔵文化財が多い地域では、そういったものも確実に増えていくので、効率的に収蔵していくためには、ある程度のスペースが必要となる。

NHKには、川口市に映像資料の収蔵施設があるが、そこは、現在、かなり余裕があるわけだが、会議室として使用している部分についても、将来的には、収蔵スペースになるような設計となっている。

いかに部屋等を使用していくかということの検討は重要であり、やはり、現在は収蔵庫を建設することは大変なことなので、いろいろと検討し、見越して対応していくことが重要である。

当館の収蔵庫もかなりいっぱいになってきたので、場合によっては、資料の受け入れをお断りするというのも現状である。また、大きな資料で屋内に入らないものは、泣く泣くあきらめているということもある。収蔵が可能であれば受け入れるが、施設として難しい状況にある。あとから改装することも難しい。

◎質疑応答

質疑 平成9年に収蔵庫ができるまでの保管・管理はどのようにしていたのか。

応答 昭和57年でしたかに中央公民館を新築したときに1階に郷土資料室という名目で展示スペースがあり、地下に収蔵庫・書庫を一緒につくっており、そこで管理していました。民具は、空き教室やプレハブに収めていたという経緯があります。

質疑 寄贈は昭和57年ぐらいから受け付けたということか。

応答 寄贈はもっと前からあります。それまではどちらかのスペースに分散して置いていたということです。

質疑 平成9年に収蔵庫に移動したということか。

応答 平成9年に博物館ができたときに、民俗資料については一元化していくということになり、こちらで番号を付けて管理をしています。

質疑 燻蒸は収蔵庫ができてから行っているのか。

応答 それ以前にも公民館で保管を行っていた時から行っていました。

質疑 年間の入館者はどのぐらいで、どのような傾向があるのか。また、入館料が無料だが、有料化の議論はあったのか。

応答 平成26年度の入館者は4万8,605人です。一番多かったころには6万人近い入館者があったのですが、平成25年度以降は減ってきています。

入館者の傾向ですが、博学連携事業による学校との連携により小学生も多く、もちろん年配者もいらっしゃるので、年齢層が多岐に渡っています。

入館料については、条例上入館料を徴収できると規程していますが、今まで有料としたことはありません。有料となった場合にはお金のやりとりを行う設備が必要ですがそうした設備は整っていませんので、そこから始めなくてはいけない現状です。市民からも有料化の声はいただいていません。企画展では高価な作品もあり、逆に入館料無料はありがたいという声をいただいています。

博物館法では公立博物館の入館料は原則無料です。ただし維持運営のためにやむを得ない事情のある場合は必要な対価を徴収することができるとしています。この博物館は気軽に来てもらえる面があり、手前の水槽や池で満足される子供や大人の方もいらっしゃる所以、無料のメリットがあると思っています。

質疑 博物館内に埋蔵文化財は少ないということだが、出土しないのか。

応答 博物館はもともと1つの課であり、文化財保護も生涯学習の係としてあったもので、別の組織だったためにもともと保管体制が違っていました。それがのちに1つの課になって現在では係で分かれている状態です。博物館に埋蔵文化財は入りきらないため、博物館では保管せず別の場所で保管しています。市内には遺跡もあり、埋蔵文化財もたくさん出土しています。

質疑 現在の場所に博物館が単独で建っているが、ここを選んだ理由は何か。

応答 おそらくですが、現在一部借地もありますが、それなりに土地を持っていないければならないことと、周囲の環境によるものと思われれます。隣に寺がありますが、市内のほぼ中央に位置し、一番古い寺社であるという立地もあるのかもしれません。

質疑 収蔵品の利用について、テーマを決めて何か企画等を行ったりしているのか。

応答 ある程度のテーマを決めたミニ展示や、かつては収蔵品展を行っていました。今は、一部よその収蔵品も含みますが、企画展での公開や機会があれば出せるようになっています。

質疑 火災対策として二酸化炭素による鎮火というのは全国的に行っているものか。また、二酸化炭素による消火の例などもあるのか。

応答 おそらく、多くの収蔵庫は、水を使わずに二酸化炭素か窒素によって鎮火する方法を取っているのではないかと思います。当館でも人が入る部分については消火栓や消火器があったように、併用しているところが多いのではないかと考えます。資料が燃えずに済んでも水に濡れてダメになってしまうので、資料

の多いところでは、水を使わない方法になるのではないかと考えます。

質疑 年間の入場者の市内外の割合についてわかるか。市外からの場合は例えば子供たちが観光バスで来館するようなこともあるのか。

応答 おおまかなことしかわかりませんが、入場者アンケートによれば8、9割が市内の方です。今回のような企画展では市外の方も比較的多いように見受けられます。市外の小学校では、富士見市の小学校や新座市の立教新座高校が毎年来ています。かつては和光市の学校も博学連携で来ていました。

小学校3年生の「昔の道具調べ」では、バスを借り上げて来館しています。

質疑 逆に博物館から学校に出向いたり、高齢者施設や地元に対して出向いて展示を行ったりということを行っているのか。

応答 出張展示というものは実施していないが希望があれば検討したいと思います。小学校3年生の「昔の道具調べ」で学校のバスの借り上げがなかった時には、こちらから道具を持っていき教室に展示していました。博学連携で小学校6年生に対しては、火おこし体験のためにこちらから行っています。また1年生には糸ぐるまに関する授業でこちらから行っています。高齢者へのサービスについては、こちらからということはありませんが、市内に限らずデイサービス利用の来館はあります。

質疑 歴史的建造物の保存はどうしているのか。

応答 建物に関しては指定文化財等、そういった方向性があるので扱いが別になります。収蔵庫に入らないような大きなもの、例えばオート三輪車などは収蔵をあきらめています。

質疑 職員の体制、全体の人数や学芸員等の内訳について教えてほしい。

応答 現在職員は13人です。そのうち博物館を担当している者が5人、埋蔵文化財関係を担当している係が6人、そのほかが2人です。学芸員は博物館で3人、文化財保護の係で4人です。

5 所感

川越市においても朝霞市においても事業として学校との連携にも力を注いでおり、特に川越市立博物館では児童生徒が来館して行う授業や、体験的な講座・教室等を数多く行っており、大変参考になった。

また害虫駆除のために行う燻蒸や、湿気調節を可能とする木材壁面の特別収蔵庫、二酸化炭素による火災対策等の施設維持・管理、さらに専門職員の配置やボランティアの活用等の人材活用、それらに伴う予算、寄贈の受け入れ等、文化財保護ために配慮すべきことの多種多様さを実感した。これら今回の視察で得たものを参考に、今後の委員会審査等に活かしていきたい。